

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(35) 平成13年11月15日

江戸時代の旅の情報誌(4)

『東海道木曾路広馬道中記』(S091.3/2/429)

今回紹介するのは、享和2(1802)年に刊行された『東海道木曾路広馬道中記』です。表紙見返しには、書名に続いて「享和新版 改正増補」とあります。大きさは縦12cm×横16cmで、旅先に携帯できる大きさです。

本書は、「東街道中重宝記」と「木曾道中重宝記」を中心とする道中案内で、重宝記とあるとおり携帯版としては詳しい内容となっています。いずれも江戸からの下り道中について、次宿までの距離、駄賃・人足賃、本陣・脇本陣・問屋・渡船場の川越役人の名前、街道筋の神社・仏閣・名所・旧跡などが簡潔に記されています。実用本位の道中記ですが、随所に挿し絵も入れられています。

さらに、見返し詞書きに「諸方のまはり道に至る迄はしく書きあつむ」とあるように、「東街道重宝記」につづいて「伊勢参宮道中記」・「遠州秋葉山并鳳来寺へ道法」を掲載し、「木曾道中重宝記」の後には「東より信州善光寺迄道案内」・「江戸より鹿島へ道法」・「行徳より香取道」を書き記しています。たとえば、掛川から秋葉山へ詣で、さらにそこから鳳来寺へと足を延ばし、東海道御油宿までで約26里(約100キロメートル)の道筋を紹介しています。庶民の旅が隆盛になったとはいえ、誰もが好きなときに旅に出かけられたわけではありません。ですから、例えば伊勢神宮を目指す人が、途中で秋葉山・鳳来山へ詣で、伊勢参拝の後は善光寺へも足をのばすということも多かったようです。一冊で東海道・中仙道筋、さらにはそこから延びる周辺社寺への道法を知ることができる本書は、旅の携帯道中記として重宝したことでしょう。

さて、『東海道木曾路広馬道中記』は、江戸の「書林」である江戸日本橋平松町の奥村喜兵衛・日本橋通三丁目川六左衛門により刊行されました。書林とは出版業・販売業を兼ねる本屋のことです。「温故知新」(32)で紹介した『東海道名所図会』は、大坂柳原喜兵衛、京都田中庄兵衛ほか6人、江戸須原茂兵衛ほか2人の合わせて11人により出版され、同(33)『東海道木曾路道中懐宝図鑑』は江戸須原茂兵衛、同(34)『道法早算道中記 東海道中仙道』は、初版を出雲寺万次郎・岡田嘉七が出版し、本館所蔵の嘉永5年版(第三版)は須原茂兵衛ほか4人が名を連ねています。

江戸時代初期には上方で出版された出版物の取り次ぎ販売を主に行っていた江戸の本屋が、独自の企画による本の出版・販売を始めたのは宝暦・天明期(18世紀後半)のことです。なかでも須原茂兵衛は、教養書・物語書の出版・販売を行う江戸最大の書物問屋で、分家を含めた須原屋一門は江戸の書物問屋全体で約2割を占めていました。分家の中には、杉田玄白・前野良沢の『解体新書』を刊行した須原屋市兵衛もいます。

文久2(1862)年から明治2(1869)年までイギリス外交官として日本に滞在したアーネスト・サトウは、自らの回想録『一外交官の見た明治維新』(岩波文庫、080/113-4)に、「実に日本人は大の旅好きである。本屋の店頭には、宿屋、街道、道のり、渡船場、寺院、産物、そのほか旅行者の必要な事柄を細かに書いた旅行案内書の印刷物がたくさん置いてある」と記しています。旅の目的は、神社・仏閣への参詣、温泉での療養、商用、あるいは領主役所への嘆願や訴訟と様々でしたが、人々は本屋が出版する多種多様な道中記・道中案内書を読み、あるいは携えて旅へと出かけたことでしょう。

<参考文献>

『道中記集成』第19巻(291.09/㌸)